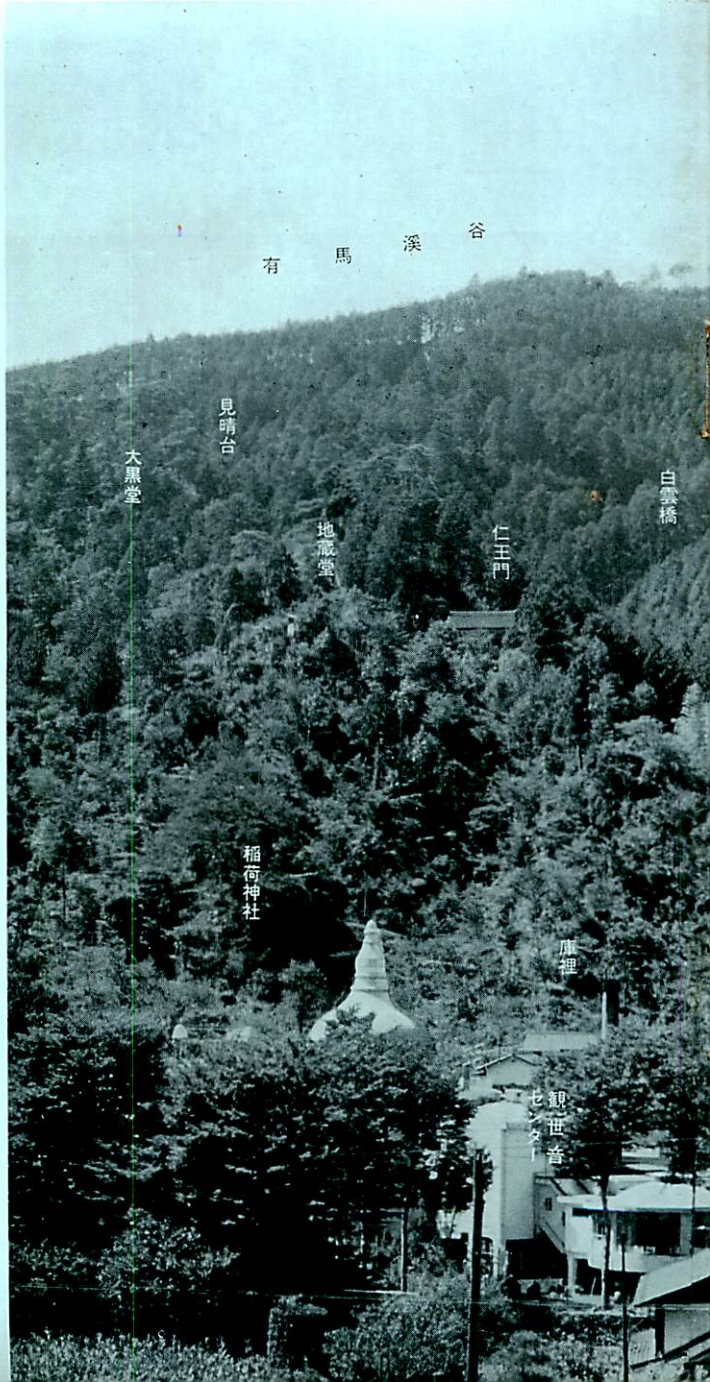


白雲山 鳥居觀音のしおり

12

昭和四十四年十月一日発行



白雲山鳥居観音境内面白岩の
台上に建立中の大観音完成模型



基壇建物二百平方米	高さ十米
基壇上の大観音	高さ二十一米
基壇上の傍侍菩薩	高さ十二米

印度附近の旅路 (其の二)

桐 江

釈尊成道の地「ブダガヤ」

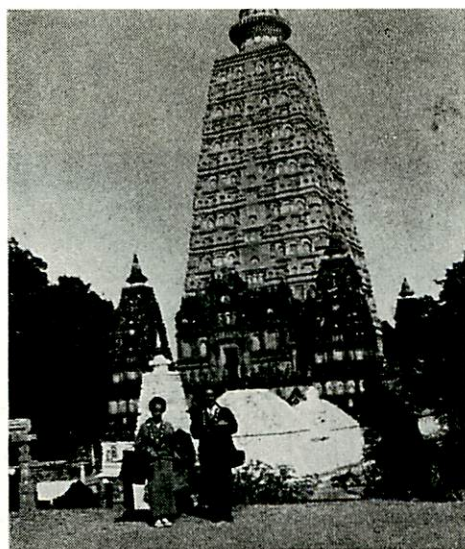
十月三十一日「起床ですよ」と四時に電話で起され、目をこすりながらロビーに集合し、飛行機で北方に飛ぶ事一時間半で、全印度を征服した(阿育王^{あしよか})の建てたマガタ国の首都パトナに着きました。

そこから自動車で、菩提樹等の大並木の間を、走ること二時間で、ナーランダ大学に到着しました。

そこで、中村さんという日本の留学僧に会ひ、二日間におたり、印度仏跡のお話しや、ご案内をして頂いたり、珍らしい家庭的なご馳走に舌鼓をうちました。

そして夕方ブダガヤの「トウリス」という、当地では一流のバンガローに到着しました。しかし一流とはいえ、バンガローの名のとおり、入浴も出来ず、大根や人参も炊事場の床で料理していると云う、印度流のやり方を見ますと、食欲も出ません。

夜、庭に出たところすぐ目の前に、阿育王が建てた五十四米もある、四角形の有名な大塔が、すみきった空に、おりからの満月の光をうけて、くつきりと黒く



ブダガヤの大塔

浮び上ってしまして、釈尊が暁の明星が出るころ、生老病死による、人生苦痛の本源を断ち切って、悟を開かれて覚者(仏陀)となられたのも、このような静寂で神秘的な情景であったのだろうと思うと、二千五百年前のブダガヤに居る心地がして、厳肅な有難さ、しかもロマンチックな感傷に打たれて、心から般若心経を口ずさんだのも、この聖地でなければ味えません。昼の炎暑に苦しんだ私は、ひややかな夜景に誘われ

て、塔の近くまで行って見ようと思ひ、門を出たところ、やかましいラジオや、しつこくつきまといつてくる土産物売り、乞食などになやまされて、折角の気分もめちやくちやにされて、部屋に逃げかえるありさまで、この聖地も俗化してだいなしだいなしと口惜しくなりました。

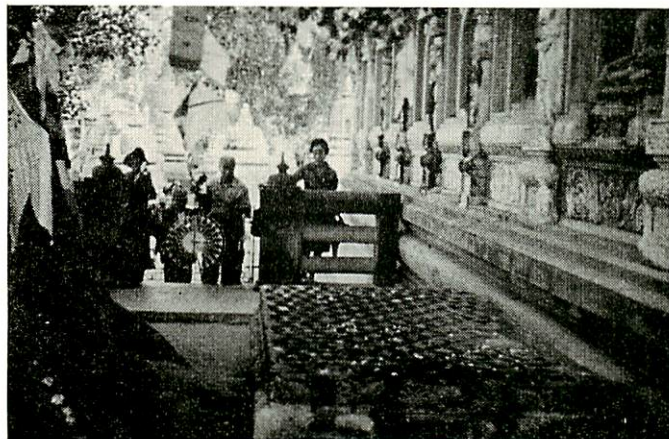
翌十一

月一日、

中村氏の案内で、

この仏塔の説明を聞きながら参拝しました。

以前来たときよ



ブダガヤ金剛宝座

り色々整備されて、世界中の仏教国からの参拝者も多くなつたようだし、金剛宝座の右側には以前にはなかつた灯明台が出来て、数百のローソクがともっているのも、神々しく感じました。

塔内の釈迦尊像の前に正座し読経すると、三回もこの靈地に参ることが出来る。来た感激に、胸せまるものがありました。

この大塔

の近くに、

日本で建てた法篋印塔

や、タイ、

チベットな

どの、其の

国独特の変

つた寺院が

建ち並んで

おります。



ブダガヤの大塔の内部 開祖夫妻

チベット寺には、直径二米、高さ七米もある、円形のくるくる廻る経庫があり、皆これを廻転させておりますが、これを廻すと、沢山のお経を読んだのと同じ功徳があると信じられています。

ラジギール（旧王舎城附近）

そこから自動車で、東に二時間行くと周囲を山で囲まれたラジギールがあります。

山の峯々には、王舎城を守る石積の城壁が延々と続いております。

この王舎城のなかに、ピンビサーラ王の造った竹林精舎があると、云ひ伝えられていました。

或日のこと、溜池を造るために掘ったところ、ブロンズの如来像や当時の遺品が出たので、竹林精舎の遺跡であることがわかりまして、今は美しい公園になっており、そこで掘り出された如来像などがまつられております。

案内者が、その竹やぶから、記念にと竹の葉を折ってくれました。

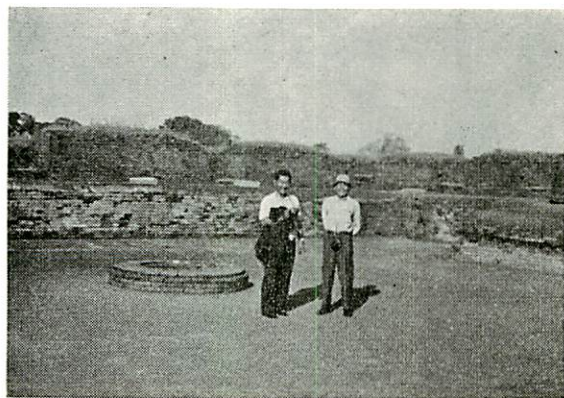
ピンビサーラ王の牢獄

その近くに悲しい物語りとして、云ひ伝えられてい

る、ピンビサーラ王の幽閉された、牢獄の跡があります。すが、殆ど壊れていて、わずかに礎石が当時をしのばせます。

王子「アジャータシャトル」が父王「ピンビサーラ」を、牢獄へ幽閉して、嚴重な見張を置き食物を与へず、餓死させようとした。

ところが父王の妃が王に面会することを、漸く許さ



ピンビサーラ王の幽閉された牢獄の跡

れたので体に蜜をぬって牢獄に入り父王になめさせていたため、父王はなかなか死にませんでした。なので、王子は不思議に思ひ、遂にこの秘密を知り、其の後は王妃が牢獄に入

る事を許さなかったために、とうとう王は飢死にしたという、あわれな物語りがある遺跡です。

この親不幸な王子が、王位につきこの近くに新王舎城をたてたのですが、その後王は、その非を悔い、釈尊に帰依して、仏教の保護者となりました。

又その近くに、平たい岩に「車の轍」が蜿々とほられておりました。

これは自国の車輪の巾で造られており、「他国の戦車が侵入することが、出来ないようにしてあるのだ」と云う説明でしたが、敵国は侵入する前にこの車輪の巾ぐらひは、スパイするでしょうから、他の説の、ビンビサーラ王が、釈尊のために造った道路だと云うのが、至当かと思ひます。

靈^{りよ}

鷲^{じゆ}

山^{せん}

王舎城の東方に聳えている靈鷲山は、釈尊がながく説法をなされた遺跡ですが、山頂まで蜿々と築かれた石段も、ビンビサーラ王が釈尊のため造られたもので、この前の印度旅行のときは、頂上まで登りました。

頂上から見渡すと一面のジャングルで、それも茨の木が多く生え茂り、今でも虎や、豹などが出るため、



王舎城の「車の轍」
わだち

日本寺の僧が「靈鷲山に登る時は、團扇大鼓を打ちながらして、猛獸防けをしていきます」と話しておりました

日蓮宗の日本寺

近くの日蓮宗の日本寺を参拝しました。

その裏山の頂に塔があつて、登るリフトが造られて居るのも、日本人らしい計画だと思ひました。

印度には、このほか日蓮宗のお寺が二ヶ所あります
が、印度の仏教興隆の捨石として孤軍奮闘している、
その熱意には全く感心しました。

釈尊が浴された温泉

ここには釈尊が入浴されたという温泉があり、その
上方には現在ジャイナ教の寺院がありまして、手長猿
が沢山おります。

其の後、仏教からヒンズー教に変わったため、温泉も
人間の階級により四段階に別れて浴槽があり、土民は
皆着物を着たまま入浴しております。

この温泉も仏教の盛んな時代には、湯も非常に豊富
で賑やかだったとの事ですが、今は湯量も少なく仏教
のにおいも、薄れて淋しさが感じられます。

第一回の結集の岩窟

その寺の後ろの山の中腹には、釈尊入滅後、仏典を
まとめるための、第一回の結集を行った七葉窟という
岩窟を見ましたが、入口の岩がくずれていて、穴深く
入る事が出来ませんでした。

この結集は、その後百年目ごとに仏教国の所々で実
行されております。

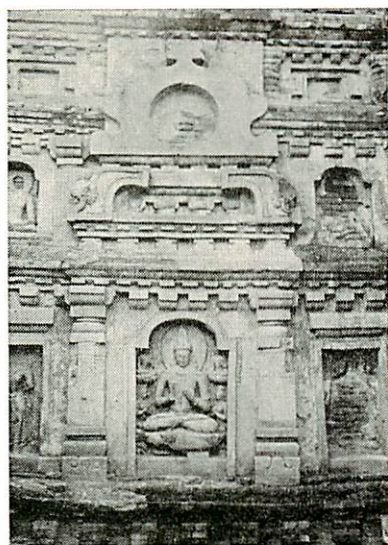
十五年前にビルマで行われた、第三回世界仏教徒大
会は、第二十五回目の結集に当るので、岩のないビル
マでは山奥から岩石を運んで、この七葉窟を模して、
二万人も入るドームが造られ、その中で仏教徒大会
が、開催されたのです。

親切なビルマの僧が、私をその頂上に案内してくれ
たり、昔を偲ばせるような僧房でお茶をご馳走になっ
たことがあります。

ナーランダ大学

このラジギールに別れて三十分も行くと、ナーラン
ダ大学につきます。

ここは二千人の指導僧と、一万人の生徒がいたとい
われるだけあって、四階づくりの広大なもので、二米
以上もある煉瓦の厚い壁でしきられた、豪壮な建物で
すが、回教徒に破壊されたのと、風雨のため荒れ果て
ておりますので、今迄私は煉瓦づくりだとばかり思っ
ていましたが、今回奥深く入って見たところ、煉瓦に
漆食が塗ってあり、石の仏像や、壁彫の残っているこ
ろがあって、当時は、さぞや美しく立派なものだっ
たらうと、初めて見なおしました。



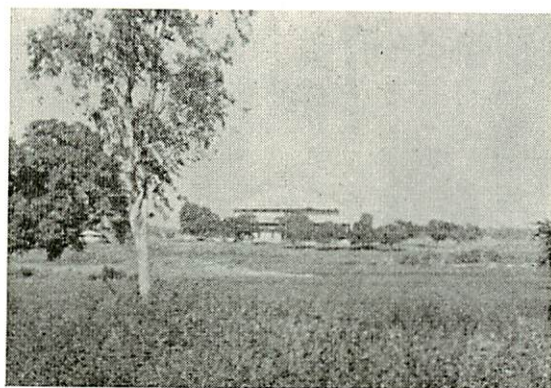
ナーランダ大学跡の壁彫

玄奘三蔵法師の新寺院

この癡虚の上から見ますと、東方千米ぐらいのところに、新築したばかりの中国式の白亜のお寺が、樹木の間に聳えて見えます。

これは七年前、周思来から印度のネール首相に贈られた、玄奘三蔵法師の頂骨を納めるため、新築されたものです。

私が三年前印度の仏跡を巡拝した折りは、法師の靈骨は、近くの博物館に奉安されておりまして、法師の遺品、記録等を集取中だという話でしたが、今回こ



玄奘三蔵法師をまつる白いお寺

た。

その夜はパトナに宿泊いたしました。

牛の糞を拾ふ少女

十一月二日、早期パトナの町を散歩しましたところ、可哀い子供達四人が、牛の糞を拾って頭上の籠に入れてるのが珍らしく可哀かったので、写真をとろ

の立派な大きなお寺が出来上っているのを遙拝した時は、三蔵法師と因縁の深い私として、実に嬉しかったのですが、時間の関係上参拝すところが出来ませんでしたし

うとしてそばによると、皆逃げ出すので止むなく断念すると、又ここにこ笑ひながら近よって来るので、又写真機をむけると逃げる、之を三、四回も繰り返して、全く子供に醜弄された形ですが、之はチップをねだるためか、写真が嫌なのか、今だに不思議に思っております。

全く写真を写すにも、相手によっては、よいポーズをする者、怒る者、チップをねだる者等なかなか難かしいものです。

アシヨカ王の宮殿

ベナレス行の飛行機が大分遅れたので、仏教発展に偉大な功績のあった、アシヨカ王の宮殿の遺跡を見物しました。

マガタ国のアシヨカ王が、王舎城からこのパトナへ都を移したのですが、その宮殿は地下に埋れて不明だったが、池を掘ったところ、直径一米ぐらいの石の柱を始め、沢山の貴重な品々が出たのでアシヨカ王宮と確認され、今は立派な公園となっており、出土品の陳列場もあります。河畔近くには今も城の跡があるとの事です。

この近くに第三回目の結集をしたという、鷄喪寺が

ありますが、このお寺も土台だけが残っているとの事です。そして初めてパリー語で仏教書が統一して印刷されたのも、この経集の時だとのことです。

釈迦入滅後二百年頃、アシヨカ王は印度を手中に収め、西はエジプト、東はカンボジャという広大な地域にまで布教師を送って、仏教の宣布に努めたり、寺院もおびただしく建立し、又有名な数十尺もあるアシヨカ王の石柱八万六千本を全国いたるところの仏跡に建てる等、世界的仏教の基礎をつくった王様です。

このアシヨカ王の石柱は、所々で見ることが出来ました。

ベナレスの水浴場

十一月三日早朝、ヒンズー教の一大巡礼地たるガンチス河の水浴場を見物に行きました。

此処はヒンズー教のメッカといわれる位で、信者は一生に一度以上必ずここに巡礼しなければ、天国には行けぬと信じております。その為め千数百のお寺が川岸に林立し、毎日二万以上の巡礼者が水浴するとのことです。

しかし沢山の牛や癩病患者、片輪の乞食や物売りでござったがえしている不潔なありさまは、前の時よりひ

どい様です。信者がガンジス河の岸で水浴し祈っているありさまを遊覧船で見物しました。

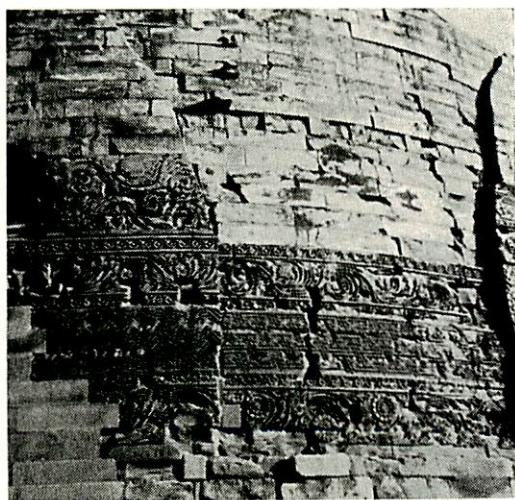
写真を禁じられている、露天火葬場が川の端にありますが、その附近には数十羽の禿鷹が、お寺の屋根等にとまっております。そして河には人間の半焼けと思はれるものがぶよぶよ浮いております。之は薪が高価で貧乏人には一人焼くだけの量の薪が買えず、半焼けで河に投げ込むからとのことです。

しかし昔は水葬であったとの事ですから、信者から見ればあたりまえでしょうが、実に氣持が悪いです。この禿鷹は朝夕人の少ない時に、この肉を食うためにいるに違いありません。

ところがヒンズー教徒達は、このきたない河の水を最も有難い靈水と信じて、着物を着たまま水浴したり、嗽うがなどしてお祈りをしております。又この河の水を壺に入れて国に持ち帰るといふ狂信ぶりには、全く驚くほかありません。

鹿野苑

鹿野苑には三度目でもあり、四時起床が四日もつづき、その上寒暑の差のひどい所を飛び廻って、いささか疲れたので宿で休養したのですが、鹿野苑の名高い



鹿野苑のダメーク塔

煉瓦のくずれかけた、ダメーク塔も大分復元されておるとの事で、印度の仏教も漸時興隆しつつある様子が窺はれて有難い事だと思ひました。

釈尊と六年間苦行を共にした五人の比丘は、釈尊が苦行をやめて女人の捧げた乳を呑まれた事により、釈尊は墮落したと怒って、この鹿野苑に来て修業してました。

釈尊はブダガヤで悟られた、有難い真理を先ずこの

五人の比丘に伝えようと鹿野苑に行かれました。

ところがこの五人は、始めは釈尊を馬鹿にしておりました。ところが、釈尊の説法の深遠なる真理に感激して、釈尊の初めての弟子となり、これが波紋の如く全国に拡がり、ここに大きな初転法輪寺という立派な修業所が建てられました。後年回教徒のため破壊され、今はその広大な礎石と、ダムーク塔とを残すのみであります。

野 生 司 画 伯

ここには今より数十年前に、英国人が建てた新しい初転法輪寺があります。

その大きな壁画の釈迦一代記は、日本の野生司香雪画伯が六年の歳月と艱難を克服して、美事に画がかれた名高い壁画があります。

ある時は金がなくなつて画伯は、自分の画いた絵を売り歩きつつ、その製作を続けられたと聞きまします。

私は十三年前この絵を見て感激し、早速野生司画伯にお願ひして、鳥居観音本堂の壁画に観世音菩薩に因縁の深い補陀落山等の絵を一年ぐらいかかって画いて頂きました。

鹿 野 苑 の 伝 説

この鹿野苑という名がついたのには、次の様な伝説があります。

昔ここに沢山の鹿が住んでおりました。時の王様がここに狩に來たので、鹿の王は王様にむかつて、

「これではわれわれは一度に滅びてしまい、死体は腐つて王様の食膳に上りません。ですから一日一頭づつ差上げれば、われわれの命も延び、王様も新鮮な肉を喰べることが出来ます」と嘆願しました。王様も心よくこれを承知されました。

ところが次に殺される番が來た雌鹿は懐妊しているので、

「小供が生れるまで待つて下さい」と鹿の王に頼んで來たので、鹿の王は、

「これが慈悲というものだ」と王宮に行き、王様に嘆願しました。王様は、

「何と立派な心掛けた、汝は鹿の形をしているが心は人間以上だ、それにひきかえ私は人間の体を持っているが心は鹿以下だ」と嘆き感心して、それより鹿を殺す事を禁じたので、鹿の樂園となり、鹿野苑と呼ばれるようになったとのことです。

布施の童話

鹿野苑の西三里のところに、釈尊が菩薩として身を焼くような苦業をされた、名高いところがあります。

そこに昔、狐と兎と猿がおりましたが、帝釈天が老人に化けてこの三匹に

「わしは餓えているから何か食物をくれ」と頼みました。そこで狐は川に行き鯉をとり、猿は森で果実をとって来て、この乞食に与へました。

しかし兎は人の喰べるものを獲ることが出来なかつたので、

「私を喰べて下さい」と火中に飛び込んで焼け死んでしまいました。帝釈天はその屍をだき上げて、月の世界につれて行ったという伝説があります。

日本の兎のもちつきの童話も、これからきているのでしよう。

トルガ寺院

二千ポンドの純金の延板で丸屋根をはったといわれる、よだれの出る様な丸屋根があり、お寺の中にはシバの神が乗ったという神牛の石像がありまして、信者が水でこれを洗っております。そうすると来世は幸福

な生活が出来ると信じているのです。

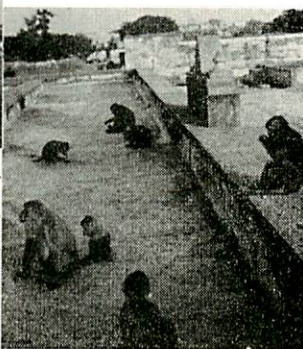
モンキー寺院

この寺院は、昔ジャングルを切り開いてつくったので、その時いた沢山の猿が住みついたという珍らしい寺院です。

本堂の中央に、



モンキー寺院の屋上



っておって、日本の、わに口のように信者が盛んに鳴らすので賑やかです。私もこの奥に入って参拝したところ、僧が私の額に赤い色をつけ、首にレイをかけてくれました、只ではすみません。

つづく

一尺以上のキリスト教のつり鐘のような形の鐘が沢山つるしてあり、鐘のなかから紐がさが

信仰に徹した故内田氏の想い出

鳥居観音
寺務局

八王子市丸十織維株式会社社長内田男三郎氏が、本年五月十八日、突然ご逝去なされ、そのお知らせをうけた、当山寺務局はこの日、この時くらいおどろいたことはありません。しばらくの間、重くらしい空気にとざされて、なすことも忘れるほどでした。

内田さんは当山と二十年も前から、開祖平沼先生と信仰を通じて意気統合なされ、信仰については悟りに近い信念をおもちでした。



平沼開祖と内田氏 鳥居観音楽焼場にて

当山に対しても物心共に多大のご協力を賜わって来ましたので、尊敬と親しみも深くなっていました。

昭和四十一年秋、観音講結成の運びとなるや、いち早く八王子に於て講の結成をなされ、講名を洗心講と

して、講元に就任、以来毎年、春秋の例大祭のどちらかには、講員を卒先引卒なさってご参拝くださいました。

又毎年元旦祈禱会には必ず、個人でご参拝になり、その厚い信仰心には一同深く敬服しておりました。

内田さんがご参拝なされる時は必ず愛用の珠数をお持ちになって、本堂正面に端座……礼拝……終始敬虔なそのご態度は、今も目に浮んで来ます。

庫裡で茶の接待をいたしますと、本堂でのご態度とは変って、商人気質の、にこにこした面もちで、ゆっくりと、四方山話しをなさいました。

内田さんは信仰家として、その奥を極めようとして、国内の名高い寺をお訪ずねになり、その名僧と膝をまじえて語り合い、多くの名僧の染筆を収集なされたことは有名です。

それと申すも、それら名僧の心と氏の心が、通い合ったからで、むべなるかなと云えます。

氏は生えぬきの糸商で、神山商店をふり出しに、業界に於ては多くの経験を積まれ、一種独特の才能をおもちでした。

泣きごとを云わず、それでいて頑固さが見えない、人好きのよい、昔固気の義理人情が厚い人でした。

仏の教えにしたがい、無所の境地に己を立たせ、人

間としての自らを悟って、その人生観に徹した方でした。

創業十四年、いく多の苦難をよくのりこえて、今日いよいよ、社運与隆に向つて一大躍進をなされようとする時、氏を失つたことは、まことに惜しまれてなりません。

生者必滅、会者常離の定めは、人生にとつて不変の教えですが、ご家族に対して、どうおなぐさめしてよいか、そのすべもありません。

ただただ、懷徳院行道日進居士のごめいふくをおいのりすると共に、ご家族が氏のお心を継承なさつて、しっかりとお築きになつた業を益々ご発展なさいますように、当山七観音に、その御が護を心から祈りつつ、思い出のベンを止めさせていただきます。合掌

西遊記 (其の七)

悟空がふとめをあげると、明りがさしこんでいる。彼は矢もたてもたまらなくなつて、パッとひととび、炉の外へおどり出すと、ガラガラッと七卦炉をふみ倒しざま、外に向かつてかけ出した。

おどろいたのは火たき、炉番、六甲六丁の役人たちが、よつてたかつて引つとらえようとしたが、どれも

これも放り出され、まるでテンカンにかかった白い額の虎か、フウテンの一本角の竜さながら。老君も一度はつかまえたものの、悟空にひと払いされると、頭からもんどり打つてころがってしまった。

悟空は、如意棒をとり出し風に向かつて、ひとふりすると、手ごろの太さになつたので、それをもって、手当り次第になぎ倒し、またも天堂に大混乱をまき起こした。ために九曜星はかたく門をとじ、四大天王はいづこともなく身をひそめてしまった。

まことにすごい化け猿である。

悟空、上下の区別もなく、鉄棒をふるつて西に東にあばれまわるが、誰一人相手になる者のないままに、まっすぐ通明殿をぬけ、靈霽殿まで来てしまった。

その時幸にも仙官(王靈官)が彼の狼籍を見かけ、金鞭をとつて悟空の前に立ちはだかつた。

「横道猿め、どこへ行く、わしがいるからには狼籍はゆるさんぞ」

悟空は有無を云わさず鉄棒をふるつて打つてかかるのと、靈官たちをふるつて迎え打ち、ふたりは靈霽殿の前で大格闘。

勝敗いまだ定まらぬに、佑聖真君は、高級武官を雷府にやつて三十六員の雷将を動員して来た。

雷將たちは悟空をとり囲み、勢いするどく攻めたて
る。悟空少しもひるまず、諸將の得物のふすまをみる
や、たちまち身をゆすって三頭六臂に変じ、如意棒を
ふって三本とし、六本の手でこれを使い出した。

それは紡車のごとく、重囲の中をとびかい、雷神た
ちも近よることができない。

雷神たちは、悟空をなかに囲んで遠巻きにしたまま
わいわいやっている、そのさわぎは、早くも玉帝を
おどろかした。

玉帝は、二人の侍官に、西方の釈迦如来に、悟空の
調伏を頼んで来るよう命じた。

二人は旨をうけて、佳境靈山に到着、雷音宝刹の前
で、四金剛と八菩薩にあいさつし取つぎをたのんだ。

諸仏が宝蓮台のもとに来て、その旨を通ずると、通
すようにと如来のことばに、二人は、三めぐりの礼を
ほどこすと、台下に侍立した。如来

「玉帝が、そちたちをつかわされたのは、どう云う
用むきか」

そこで二人は、齊天大聖についての委細をひととお
り話し、いまや事態は容易ならぬものがあるので、玉
帝は如来のご救援を願っている旨を申しのべた。

如来は、それをきくとすぐ諸菩薩に向かつて、

「そなたらは、この法堂でおとなしく座っていないさ
い、わたしは妖魔をこらして玉帝をお助けしてくるか
ら」

と云いのこし、あなん、かようの二尊者をつれて、
雷音寺を立たれた。

靈霽殿の門外につくと、突然ときの声か耳をうった
三十六員の雷將たちが悟空をとり囲んでいるのである
如来は、雷將たちに、戦を中止して円陣をとき、大
聖を放してやるように、わたしが訊問するから、との
法旨を伝えた。

雷神らは、それに従って引退く、悟空また法相を取
めて本身にもどると、如来に近よりぶんぶんしながら
声もあらあらしく、

「お前はどこの善士だ。いくさのとめだてしておい
て、おれを訊問すると云ったな」

如来はにこにこして云った。

「わたしは西方極楽世界の釈迦牟尼尊者、南野阿弥
陀仏だ、そちは狼籍もので、しばしば天堂をさわがす
とききおよんだが、お前はどこで育ち、いつ得道した
のか、またどうしてこのようなならんぼうをはたらくの
か」

すると悟空、

「そもそもわしわ——

天地生み成して靈仙にひとしき、花果山中の一老猿。水れん洞をすみかとなし、友を押し師をもとめて太玄を悟る。ねりなせり長生の多くの法、学びおぼえし変化は広きこと無辺。風間にありて地せきをきらい、心を立てて瑤天に住まんとす。靈靈宝殿は他の久しうするところ。強者は尊きとなす、我にゆずるべし、英雄はただこれあえて先を争う」

如来はきいてハッハッとあざ笑い、

「そちは、たかが猿の化けもの。身のほどもわきまえず、玉皇上帝の尊位をうばおうとは何ごと。かのお方は幼少より修行にはげみ、一千五百五十劫の苦行を積んだのだ。一劫といえば十二万九千六百年。無極の大道を会得するのにかほどの年月を経られたか考えてみるがよい。

そちのような人間になりたての畜生が、いかでかかの大言がはけようぞ。人でなしめ！……

せっかくの寿命をちぢめるぞよ。はやはや帰順してゆめ妄言をはくまいぞ。ひとたびきびしい刺激にあつてみよ、命はたちどころに終つて、そちの本来の面目をまつとうすることはかなわぬぞよ」

「玉帝がどんな修行をしたからって、宝座はまわり

もち、もしゆずらなきや、も一度あばれて、さんざんこらしてやる」

「そちは長生変化の法のほかに、どんな能があつて、天宮の勝境をとりたいのか」

「おれのやることはうんとあらあ、七十二般の変化の術をもつてるし、万劫にわたつて不老長生だ。

きんと雲にのれば十万八千里はひとつとび。これで天位につけないことがあるものか」

「ではわしとひとつかけをしよう。そちにわたしのこの右の手のひらからとび出すうでがあつたら、そちの勝とする。そしたら、ことさらつらいいくさをするまでもなく、玉帝におねがいで西方に居を移してもらい、天宮はそちにゆずるとしよう。もし出られなかつたら、そちは下界にもどつてただの化けものとなり、何劫かの間修行したうで、またわざくらべをするといたそう」

悟空は心のうちで、ほくそえんだ。

如来のやつ、えらく間がぬけてるわい。

この孫さまがひとつとんぼ返りをうてば、十万八千里とべるんだ。そんな手のひらなど一尺四方もありやしない。とび出せないって法があるもんか。

そこで、さっそく、

「そういうことなら如来さん、引きうけるね」
「ひきうけるとも、……………」

如来が右手を開くと、ちょうど、蓮の葉ほどの大きさ。悟空は如意棟をしまうと威力をあらわし、パッと身をおどらして如来の手のひらのまん中に立った。

「行くぞっ」

ひとすじの雲光走ると見るまにはや悟空の影もない。如来が慧眼を開かてごらんになると、かれは風車のごとくまわりながら、ひたすら前進を続けている。



悟空は身をおどらしてとんで行った

ゆくほど
に、ふと
五本の肉
色の柱が
見えて来
た。
それは
何やら、
生気をい
っぱいに
はらんで
いるもの
で、彼は



五本の肉色の柱がみえてきた

して、考えるのであった。——まてまて、何かしるしを残しておこう。彼は一本の毛をぬいて、仙気をふきかけ、「変われっ」とさけぶと、こい墨をふくんだ上等の筆に変った。それでまん中の柱に大きく文字をかきつけた。

齊天大聖ここに一遊せり

かき終ると毛をもとに収め、不作法にも、第一の柱の根っこに小使をひっかけ、勛斗雲をかえして、まっすぐもとにもどると、如来の手のひらに立って、

考えた。
こころ
がどうや
ら行きど
まりらし
い。今度
帰ったら
如来の保
証で、靈
露殿には
おれが坐
るときま
った。そ

「おれは手のひらをとび出して今もどって来たぜ、さあ玉帝に天宮をゆずらしてくれ！」

如来はしかりつけた。

「なんじ小便猿は、わがとりこじや！ 気のどくだがそちはわたしの手のひらから出てはいけなかぞ！」

「お前さん知らんのか、おれは天の端っこまで行き青くさいにおいがいっばいしている五本の肉色の柱があったので、そこへしるしをつけて来たんだ。」

なんならおれといっしょに見に行こう」

「行くには及ばない、下をみなさい」

悟空があかめを大きくあけて、下をのぞきこむと、なんと如来の右手の中指に「齊天大聖ここに一遊せり」とかいてある。

おや指の股のところには、まだ猿の小便のにおいが残っている。悟空はおどろいた。

「こんなばかな、こんなばかな！ おれは、この字を天柱にかいてきたのに、どうして如来の指なんかにあるんだらう。こりゃ「見通し術」でも使ったのかもしれん。まやかした、まやかした。おれはもう一ぺん行ってくるぞ！」

悟空が、あわてて身をおどらせ、ふたたびとび出そうとすると、如来はパッと手のひらを返してひと打ち

悟空を西天門外にはじき出した。

そして五本の指を、金、木、水、火、土の五つの連山——五行山と名づける——とし、その下になんとかおさえつけてしまった。

もろもろの雷神、阿難、加葉、いずれも合掌、

「善いかな、善いかな！」

とほめたたえた。

釈迦如来は、妖猿をとりおさえてしまうと、阿難、迦葉を呼んで西方に帰ろうとした。

すると、天蓬、天佑の二元帥がいそぎ靈霽殿から出て来て云う。

「如来さま、しばらく。お上がここへ見えられます」

きいて如来、こうべをめぐらしてふり仰ぐと、ほどなく、きれいなみこしがみえて来た。玄歌妙楽がかなでられ、無量の神章が吟詠される。

玉帝は宝花を散じ真香をまきつつ、如来の前までくと、

「大法のおかげで妖猿をとりしずめることができました。どうか如来どの、一日ご逗留ください。清仙を招いて、小宴を催おし、謝意をあらわしたく存じます」

如来は合掌して、

「わたくしは、大天尊のお召しによってうかがいま

しただけ。なんの法力などありませんものか。これは、何と申しましても天尊と諸神の大徳によるもの、お礼など申されては痛み入ります」

玉帝は、雷神の諸神に、手分けして三清・四御・五老・六司・七元・八極・九曜・十都・など千真万聖に、宴に加わって仏恩を拝謝するよう申し伝えさせ、また、四大天帥・九天仙女に命じて、天宮の大弦宝宮、洞陽玉館をあげ放たしめ、如来を上座の七宝の靈台に請じ、各班の席次を定め、竜肝・鳳髓・玉液・蟠桃を並べたてた。

やがて玉清元始天尊・上清靈宝天尊・太清道德天尊・五き真君・五斗星君・三官四聖・九曜真君・左輔・右弼・天王など、いずれも深奥玄妙の氣をただよわせつつ、それぞれに對の旗、對のきぬがさをかざしつつ到着した。

いずれも明珠異宝・長寿のくだものや珍花を捧げている。諸神はそれを如来の前に献じ、

「如来の無量の法力により妖猿を収伏することができました。天尊は宴を設けられて私どもを召され、一同お礼を申し上げるようにとのことでした。ところで如来さま、この会にひとつ名前をたまわりたいものですが、いかがでしょう」

と云う。如来

「安天大会と名づけたらよいでしょう」

と云えば、各仙老はいく同音に、

「めでたや安天大会」

となえる。終つて、それぞれの座につくと、さかづきが廻され、大琴がかなでられ、盛んな宴となつた。一同すっかり興がのつた頃、西王母が一群のうるわしい仙女たちを引きつれて現われ、流れるごとく舞いながら如来の前に来て礼をほどこし、

「先ごろは妖猿のために蟠桃の佳会をかくらんされましたが、いま如来の大法により、かの悪猿をつなぎとめ「安天大会」をこほぐことができました。お礼にさし上ぐべきものもありませんので、わたくしが手ずから摘みました大株の蟠桃を少しばかりさし上げます」と云えば、如来は合掌して王母に礼を申される。王母は仙女たちに命じて、舞えるものには舞わせ、歌えるものには歌わせて、会はひとしきり湧いた。

ほどなく一陳の異香が鼻を打つかとみるや、南極寿星が到着、玉帝に拝礼を終えんと、如来の前に来て礼をのべる。(註)阿難、迦葉の二尊者はともに釈迦の十大弟子の一、阿難は釈迦の従兄弟、釈迦設後は、長老

つづく

改正された観音講の規約

本年五月十七日に講元会議を開催、規約について種々意見をうかがいましたが、特別大きな改正点はありませんでしたが、つぎのような規約になりましたので、お知らせいたします。

一、目的

此の講は鳥居観音講と称し、鳥居観音を信仰する者及びこれに協力するものを以て組織す。

講員は鳥居観音に参拝して、信仰を啓め且つ講員相互の親睦を深めることを以て目的とする。

一、組織

1、本部は鳥居観音内に置き各講元との連絡を密にすること。

2、本部には部長一名、事務員若干名をおく。

3、各地区に講を設置して、各講毎に講元を置く。

4、講元は講員を勧募して講を組織し、講名をもつ。講員の数は限定しない。

5、講元は本部と講員との連絡を密にし、信仰を通じて講の発展につとめる。

6、本部に於て、必要に応じ講元会議を開き、講の運営、連絡等協議をす。

7、講元及び役員住所、氏名、並びに講員の総数を本部に報告すること。

尚講役員及び講員数に移動があつた場合も報告のこと。

8、講元（代理人）は鳥居観音の諸行事ある場合はつとめて参拝すること。

一、講金の徴収方法

1、講金として一人につき年額金貳百円を本部に納入し祈禱料及び通信連絡の諸費に充当する。

年度は十月一日から翌年九月末日までとす。

一、参拝について

1、本観音講は年一回団体参拝すること、但し代参を以てかえることもできる。

2、団体参拝の時は講旗を使用する。

3、講員には徽章を使用して引卒の便をはかる。

一、団体参拝の特典

1、祈禱札を無料で受けられる。

2、鳥居観音の諸施設を無料で拝観出来る。

3、観世音センターの入場料は一人につき三割引
小室使用の場合は規定の三割引とする。

但し土、日、祭日は右を通用せず

尚十二月、一月、二月、三月、は半額で土、日、祭も含。

西武線の飯能駅前から、国際興業バスが、朝の六時半頃から三十分おきに名栗、名郷行が発車しています。

飯能駅から五十分で名栗観世音センター前につきまます。そこで下車して徒歩で三分か五分で、鳥居観音、観世音センターにつきまます。

藤棚の下を通過って奥に進めばすぐ本堂です。本堂には七観音（聖観音、馬頭観音、千手観音、十一面観音、不空罽索観音、准胝観音）が安置されていて、いつもにこやかに信者、参拝の人達に笑みかけています。

自由に参拝出来るし、案内が必要なら係りがいて、親切に案内してくれます。

境内は秋の清浄な空気が流れて身も心もすがすがしくなります。

白雲山の紅葉は十月末から十一月末まで訪ずれる人の目をたのしくします。

その山合いに今年の春落慶した、山門の玉華門が、山道にその美しい姿を山のみどりに和して、建てられているのを見はります。

三蔵塔の広場から、谷をへだてて西方の台地に、新しく建立される大観音の工事が、槌音も秋の空にひび

いて、やがて完成される大観音の偉大な姿が、くつきりと秋の空に想ぞうされます。

この広場からながめる景色は当山第一の展望所だけあって、静けさと美しくしさにうっとりします。

観世音センターのご案内

鳥居観音の前に、観世音センターがあります。ここは一年中無休で、レジャーをたのしむ多くの人々のこいの場として各方面の方々から親しまれています。十月から十一月にかけて、山や川がいよいよおちついた中に、観音センターでは皆様のために、サービスをモットーに心からおまちしています。

二階は舞台つきの大広間

和室の特別室も多数ありますので、ご家族やグループのご会合には便利です。

お食事もご注文に応じて、いろいろ特別な料理も出来ます。

営業は午前九時より午後四時まで

宿泊は午後四時より午前九時まで

入場料金大人金壱百八拾円也

団体割引もいたします

宿泊料金壱千五百円也 二食つき

● 白雲山元旦祈禱会のご案内 白雲山 鳥居観音 寺務局

● 昭和四五年一月元旦 午前十時 祈禱会 於本堂

● 同 二日 同

● 同 三日 同

● 願 意 家内安全・交通安全・安産
身上安全・商売繁昌・当病平癒

● 祈禱料 金参百円・金五百円・金千円以上

● 申し込み 住所・氏名・年令記入

● 届け先 埼玉県入間郡名栗村上名栗

鳥井 観音寺 務局

● 期 日 昭和四十四年十二月三十日

毎年元旦の祈禱会を執行しております。

おかげをもちまして、年と共に、祈禱のお申し込みも増加し、それに参拝の人々も多くなり、晴着姿の方なども入りまじって、寺の新春風景も一だんと、明るさと、和やかさがわいて来ました。

一年の計は元旦にあり、と昔から云われておりますが、信仰をおもちの方々は、その年の計を先ず神詣で仏参りをして、その願いをかけ、毎日の仕事に心を打ち込んでいらっしやいます。

信仰と云うことが人の生活にどれだけ役立っている

か、それは、直接測定することは出来ませんが、世の人々が、朝はその日の無事を神仏に祈り、夕べはその日の事を反省し、明日への心構えとしたならば、その家庭は勿論、社会はどんなに明るく進歩することでしょう。そのような意味で、元旦のご祈禱はその人その人の生活の心よりどころとして、お申し込みいただくならありがたいことと存じます。

白雲山 当季雑詠

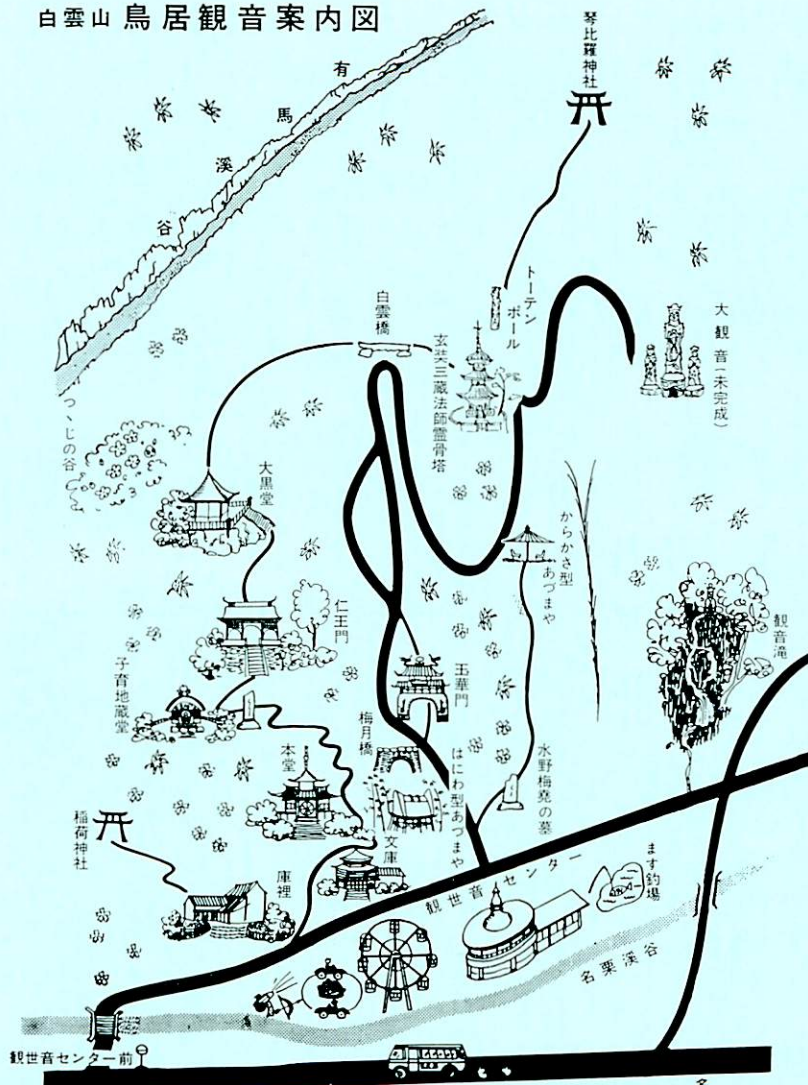
近く秋や水流るる果空の果 春映
古利なる菩提樹冬に入る光 碧嶺
花すすき風光り来て又返す 雪女
道さらに紅葉のこさと嶮を増し 未智磨
鉾杉を守る村冬へいろもやす さち
ばさばさの大樹の黄葉老いたる蛇 兜太

鳥居観音のしおり 第十二号

発行日 昭和四十四年十月一日 毎号定価貳拾円
編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三
発行人
印刷所 浦和市 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音

電話 〇四二九七〇四一五番

白雲山鳥居観音案内図



至観能35分

名栗

秋葉山

大観音（建立中）

→
観音滝

琴比羅神社

三蔵塔

蛇の目傘四阿

玉華門

埴輪型四阿

梅坑之墓

楳月橋

本堂

鳥居文庫